＜研究ノート＞

声楽指導の気付きと学び
――2016年と2019年のFDプロジェクトに参加して――
Awareness and Learning in Voice Teaching
Participating in FD Projects

山本　佳代
YAMAMOTO Kayo

筆者は，国立音楽大学で中西・本島が開催したFDプロジェクト：2016年に「音楽大学のグループレッスンにおける思考力育成の取り組み」，2019年に「音楽大学におけるFD『草の根プロジェクト2019』教師の指導への気付きを高める」に参加し，自身の声楽レッスンを認知プロセス・カテゴリーとICEモデルのフレームワークから分析をした。教育学のフレームワークからの分析は，これまで「歌う自分が教える」という経験だけでは見えなかった教師としての自分のレッスンが見えてきた。例えば，レッスンでの学生の思考への働きかけが重要であり，その時の自分の言葉掛け（発問やフィードバック）が鍵となることに気付いた。また，コロナ禍で行ったリモートレッスンでは予期せぬポジティヴな側面を感じた。本稿では声楽演奏指導の軌跡と特徴を３つの時期に分けて述べる。

キーワード：声楽指導，FDプロジェクト，フレームワーク，気付き，リモートレッスン

１．はじめに

私は，国立音楽大学で中西・本島が開催したFDプロジェクト：2016年に「音楽大学のグループレッスンにおける思考力育成の取り組み」と2019年に「音楽大学におけるFD『草の根プロジェクト2019』教師の指導への気付きを高める」に参加した。２回のFDプロジェクトの参加によって，日頃，声楽レッスンで自分がどのように学生に伝えようと働きかけているのかを，科学的に，客観的に捉える良い機会だったと感じている。本稿では，この二つのプロジェクトに参加したことから試行したこと，そしてコロナ禍で行ったリモートレッスンでの試行について，３つの時期に分けて，教師の声楽指導の気付きと学びを記する。

２．2016年度

2-1　研究の振り返り

2016年度は専攻外の学生のグループレッスンを研究対象とした。私は，声楽初心者には単純に「歌うことは楽しい!!」という学ぶ好奇心を引き出す言葉掛けや導きをすることを意識している。グループレッスンでは，個人の能力や理解力に差があり，歩みが異なるために足並みが揃わないこともある。しかし，良い面は，他の学生の歌唱を聴け，他の学生への教師からのアドヴァイスを聞くことで，気付きが生まれ，調和が生まれる可能性もあることである。学年やグループによっても，其々に個性がある。この時は１年生幼児教育90分授業（６人グループ）レッスンと２年生音楽教育90分授業（４人グループ）レッスンを研究対象とした。レッスンは「習う」「倣う」という感覚が強いのだが，演奏教育をするならば，自分はどのように学生の思考に働きかけているか，どのようにして伝えようとしているかを客観的に知ることが大切であると実感した。レッスンを録音し，認知プロセス・カテゴリー（Anderson & Krathwohl et al., 2001）を参考にデータ分析をした。ブルームについては，中西（2016）に詳細が述べられているので，ここでは簡単に記したいと思う。ブルームは，教育のための思考力についてを研究した人で，40年にわたりアメリカおよびアメリカ以外の地域でも教育目標や評価に影響を与えた人物である。

彼の弟子であるアンダーソン他が，学生に求める思考力を６つのカテゴリーに分類したのが認知プロセス・カテゴリー（Remember，Understand，Apply，Analyze，Evaluate，Create）である。声楽のグループレッスンで，教師の発話がどの認知プロセス・カテゴリーに働きかけているかを分析したのがこの時の研究であった。以下に，２回のレッスンの発話の総数，実演の回数，思考プロセスを促す働きかけの平均値とその内訳を示す。本稿に掲載した図表は拙著（2016）より転載した。

2-2 軌跡と特徴

私は，今まで自分のレッスンを分析し，数値化してみること，レッスンを科学することなど全く考えたこともなかった。この初めての試みは非常に興味深いことであった。客観的にグラフなどで視覚的に見ることは自分の傾向を捉えやすかった。教師としての私は，限られた時間の中で何をどのように伝え，どのように学生の思考の扉を叩いているのか。

まず図１を見ると，実演（学生）が一番多い。その次は発話（教師）であり，教師の言葉掛けによって，学生に実演させる時間が長いと分かる。教師は，学生に多く実演させることで「体感」し，「自覚」して欲しいと思っている。では，その発話の中で，教師はどのようなことを言っているのか。

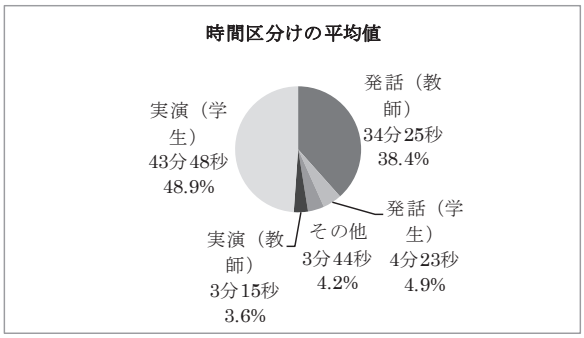

図１　グループレッスン時間区分け（90分×２）の平均値
（山本，2016，p. 77，図１より転載）

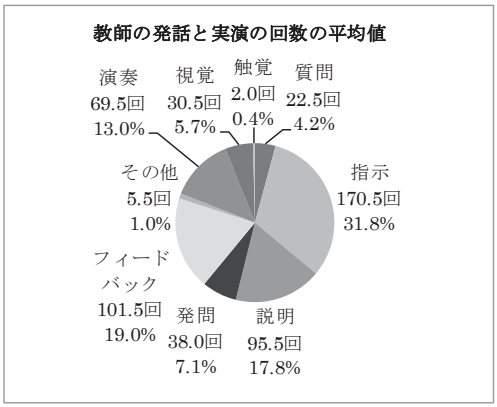

図２　グループレッスンでの教師の発話と実演の回数の平均値
（山本，2016，p. 80，図２より転載）

表１　グループレッスンでの教師の発話と実演の回数

レッスン		教師の発話						教師の実演			合計
		質問	指示	説明	発問	ﾌｨｰﾄﾞﾊﾞｯｸ	その他	演奏	視覚	触覚	
1	回数	35	177	95	40	119	6	59	25	3	559
	%	6.3%	31.7%	17.0%	7.2%	21.3%	1.1%	10.6%	4.5%	0.5%	100.0%
2	回数	10	164	96	36	84	5	80	36	1	512
	%	2.0%	32.0%	18.8%	7.0%	16.4%	1.0%	15.6%	7.0%	0.2%	100.0%
平均	回数	22.5	170.5	95.5	38.0	101.5	5.5	69.5	30.5	2.0	535.5
	%	4.2%	31.8%	17.8%	7.1%	19.0%	1.0%	13.0%	5.7%	0.4%	100.0%

（山本，2016，p. 78，表１より転載）

指示に次いでフィードバックのパーセンテージが多いことが分かる。この時期の私のレッスンでは本当に指示が多く，発話が少ない。学生の実演を聴き，フィードバックをして，指示，説明，必要に応じてジェスチャーを伴う実演で働きかけ，再び学生に実演させてフィードバックをするというパターンが多く，非常にアクティブなレッスンをしている。実演が多く，繰り返しすることで身に付けると考えている。

このレッスンから５年を経た現在のレッスンでも繰り返し実演させることの頻度は多いとは思う。しかし，この分析をして以来，フィードバックしてから，学生に感じ取らせる間，考えさせる間を与えるように意識している。また，指示をして実演させる。必要に応じてジェスチャーを伴い実演で働きかけることも多々ある。

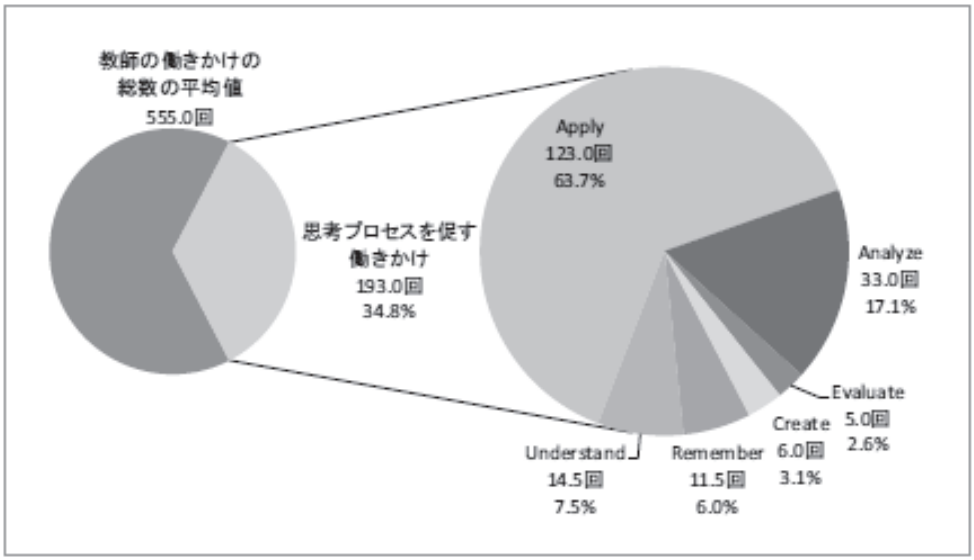

図３　グループレッスンでの教師の働きかけが思考プロセスを促す比率
（山本，2016，p. 81，図３より転載）

図３では教師の働きかけ（555.0回）のうち193.0回（34.8％）が思考を促していることが分かり，非常に効率が

良いことが示された。その内訳は Apply（63.7%）が最も多く，次いで Analyze（17.1%），Understand（7.5%），Remember（6.0%），Create（3.1%），Evaluate（2.6%）の順であった。この分析によって，私のレッスンでは学生が思考して歌うことが出来るように，特に Apply が使われていることが分かった。

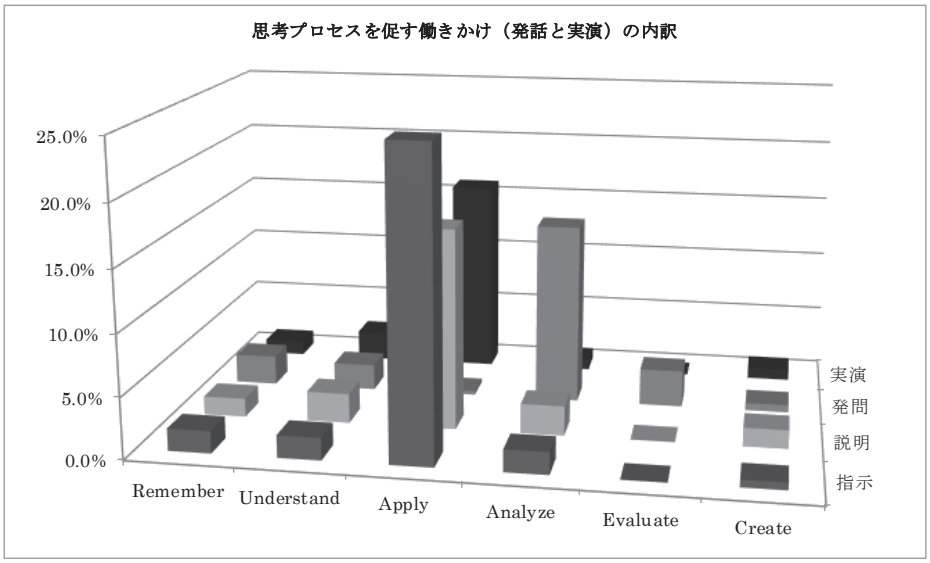

図４　グループレッスンでの思考プロセスを促す働きかけ（発話と実演）の内訳
（山本，2016，p. 82，図４より転載）

図４を見ると一目瞭然だが，まず指示，説明，実演の Apply が多い。発問は Analyze が飛びぬけて多い。教師が明確に質問し，学生に自身の実演を Analyze させることが大切と考え，身体感覚を言葉で言わせ，確認している。

2016年度の研究を見ると，教師としての私の考えの一つには，身に付けてもらうためにアクティブに反復練習をしているのが特徴であると分かる。しかし，今思い返すと学生を少し落ち着かせる間を与えた方が良かったのではないかと思う。今したことを自覚しているか，今何をしたかを確かめ，他の歌唱場所でも応用出来るかを試すことや考えさせる間を与えても良いのではないかと考える。教師の考えが変化した点である。

レッスンを目に見えるように数値化，表にしたことで，思考プロセスを促す働きかけのうち Remember や Understand，Evaluate，Create が不足していることが明確になった。学生の思考に働きかけが出来るようこれらを意識し，様々な角度から思考の扉を叩き導くことが大切だと考える。

３．2019年度の論文に至る経緯

2016年の FD プロジェクトと2019年の FD プロジェクトに至る間に，一つのステップがあった。それは2016年度に出版した報告書で使用した，ブルームの教育目標のタキソノミーをベースに発展させた，カナダの Queen's University の Young & Wilson（2001）が開発した ICE モデルを演奏教育に取り入れることであった。ICE モデルとは，学びの中で学習者が Ideas（考え），Connections（つながり），Extensions（応用）のどの局面にいるのかを調べるフレームワークである。演奏レッスンで，このフレームワークを実際にどのように使っていくのか。私達は，教師が成長し，レッスン改善をするために ICE モデルを使おうと考えた。そこで，I・C・E の要素を

明らかにし，レッスンをICEモデルにより分析するワークシートを製作した。実技レッスンを分析しやすいように，Ideasは考えを“技術”，Connectionsは，つながりを“表現”，Extensionsは応用を“センス”と置き換えて捉えることとした。そしてこれまで大学で行われてきた，招聘講師の公開レッスンから教える，伝えることの学びから得られるのではないかと考えた。そこで研究対象となる2018年の公開レッスンの前段階として，大学の図書館にある過去の公開レッスンの録画を観ながら実際に分析を試み，レッスンの分析シートの改良を重ねた。

4．2019年度

4-1　研究の振り返り

改良を重ねた分析シート（付録）を使い，2018年12月に大学の小ホールで行われた招聘講師の声楽公開レッスンを見て，ICEモデルを使って分析をした。レッスンを分析し，指導内容の焦点を数字（1－5）で表した（表3）。1は最少，5は最大を示す。その際に私は講師が指導において，Ideas（技術）にふれることが一番多いと感じたので「5」と記した。声楽は，身体が楽器であるが，楽器にするとはどういったことかの言及があった。喉が空き，身体に共鳴させ，支えることが必須であり，力むことなくそれらがバランスよく働くことが大切であると話されていた。顎は常に固くせずに楽にする。息の上に言葉を乗せる。声を出す都合のために，おでこ，肩，手，胸，目，鼻，耳，唇，口など，どこにも力が入らないようにすること。良い姿勢については重心が下にあり，立った時に横から見ると耳，肩，膝，くるぶしが真っ直ぐになり上半身は脱力する。脱力はしようと思うと力が入ってしまうものなので，講師は受講生に脱力を実感させるために，息を吐きながらピアノのボディーを押させるという場面もあった。すると下半身が支えられて，息が自然に流れレガートに歌唱出来る部分もあった。また，歌には言葉がある。例えば，eの発語で喉につまりがあった学生には，舌の位置を動かさずにaeiouと口の形を変えずに発語させてみる。特にeは下顎の力を抜き，唇を横に引っ張らない等の具体的なアドヴァイスにより，喉のつまりが解消された。上行する音型で喉の位置が上がってしまう学生には，斜め下を意識させるなどのイメージを使うと，改善された。

Connections（表現）は，Ideas（技術）を「5」とした時にICE分析では，私は「4」と捉えた（表2）。講師は、受講生の歌唱にある程度バランスが取れている箇所は，音楽的表現について言及していた。言語を日本語の意味でも分かっていることは大切だが，言葉の意味を感じること，音よりも発語を優先することで自然と表現につながる。講師の面白い教授の方法を一つ上げると，例えばdrum leiseという歌詞の間で手を一度叩かせてみる。すると，drumとleiseの間にわずかな隙間が出来て，leiseの発音がその語彙の“静か”というニュアンスに聴こえた。このようにドイツ語の発語のタイミングなどの指摘を受けることで，確実に発語が表現となる箇所があった。

このような変化の後にExtensions（センス）へとつながっていくと実感した。歌う（声を出す）ことに必死になってしまうことが多いが，曲の中には内容に適した声や音色がある。それらは作り出すものではなく，言葉の意味や詩の内容を知り，感じてそれらの関係を密にすることで表現となる。立派に歌わないところも一つの表現となる。ExtensionsはIdeasやConnectionsの道程に時間を要したため，今回のレッスンの中での割合は，少ないと思われる結果「3」となった（表2）。

表2　数字を用いた講師の指導内容についてのICE分析

Ideas（技術）	Connections（表現）	Extensions（センス）
5	4	3

（山本，2019，p. 90，表3より転載）

4-2 軌跡と特徴

講師の指導で印象深かった発言のポイントを述べる。

表３　講師の指導で印象深かったことと発言のポイント

Ⅰ．的確な教授
＊受講生に必要な言葉を的確に選択し改善へ導く。
言葉の選び方が丁寧であり，数少ない。受講生の改善点を瞬時に見抜くことが出来る。
＊受講生の演奏へのリスペクトがある。
Ⅱ．歌うことの基本を再確認
＊身体が楽器である（呼吸，共鳴，これらの意識についての説明）。
Ⅲ．自身の豊富な経験からのアドヴァイス
＊歌い手のみならず伴奏者へもアドヴァイスする。『ピアノは常に歌を支える』
＊詩の内容と音楽は密に関係している。
＊歌うことに必死にならない。言葉や内容を語るときには立派な声で歌う必要がない所もある。

（山本，2019，p. 87，表１より転載）

上記の表について考えるのは，歌うことの基本がベースにあり，講師自身の舞台での経験，その経験を基に的確な言葉で受講生を導く素晴らしさである。受講生の状態を見抜き，言葉は決して多くはないが選ばれた言葉によって導いていく。非常に説得力があり，講師が普段指導をしていない受講生の変化を見て取れたことは講師が優れていることを表していると感じた。

では，以上を基に自身のレッスン改善をどのように行うのか。私は，以下の３点を挙げた。

表４　ICE 分析の観点からの自己のレッスンの改善点

自己のレッスンの改善点	ICE
①褒める（言葉掛けをポジティヴにする） 一回目に歌うときは止めずに最後まで聴く。 前回と比較し，成長がみられる点，改善した点が少しでもあれば，それをリスペクトしていることを伝える。更に変化出来ることをプラスの表現で導く。	IC
②発声の基本を見直す 呼吸を整え，自然に体が使えるように導く。 声を出す前の準備として，呼吸はどうなのか。 気持ちは落ち着いているのか，バランスはどうなのか。 脱力と歌うための支え（体幹）は感じられているのか。	I
③発問をし，学生の返答を待つ 言葉の意味を感じさせる・詩を読ませる・詩の情景や世界を想像させる。 声を出す技術だけではなく，言葉の意味，内容を知っているのか。どう捉え感じているか。言葉と音楽の密な関係を感じる時を与える事が歌唱も助け，表現として成り立つことを伝える。	CE

（山本，2019，p. 91より転載）

レッスン改善の３点を３つのケース（声楽専攻の２名を取り上げた。内１名は１回、もう１名は２回）のレッスンの際に意識しながら進めた。

①に関して３つのケースに共通することは，「前回よりも○○が良い状態に変化している」等少しの変化，改善しようとする姿勢を認めることが，学生の気持ちも落ち着きやすく，表情や身体の緊張は緩みやすく雰囲気も変化する。変化することは，その学生の知らない扉を開くようなもので，容易に開けられること，なかなか開けられないことがあると感じる。技術的・精神的・思考的なバランスによって課題が解決されるか，そうでないかは大きい。そのため，教師の言葉掛け，導きが非常に大切であることを再認識させられた。

②に関して共通することは，最も大切な基礎には時間をかけること。焦らせないこと。身体の感覚で学ぶことなので一定の定義では語れない。良い呼吸によって整った身体で，声を出す準備をする。そして力まず，自然に歌う。身体を楽器にする大切さ，基本の大切さを改めて感じた。

③に関して到達することが出来たのは１ケースのみだった。やはり Ideas（技術）なしには到達することは困難であるが，バランスが整い一つ成立すれば，展開が出来る。歌唱で表現が出来ると感じると，それは自然に音楽をする喜びに変わり，下図のように，それぞれが影響しあい，バランスが取れるように思う。導き方で Extensions（センス）にたどり着くことが出来る。Extensions（センス）を学生に感じさせることはとても重要である。

①と②と③は，一つの要素が動き出すと，他も自然に手をつなぐように影響し合っている（図５）。今回の分析シートを使っての ICE 分析は，其々がバラバラではなく Ideas（技術），Connections（表現），Extensions（センス）が影響し合って，その学生なりの「歌」になることが分かった。

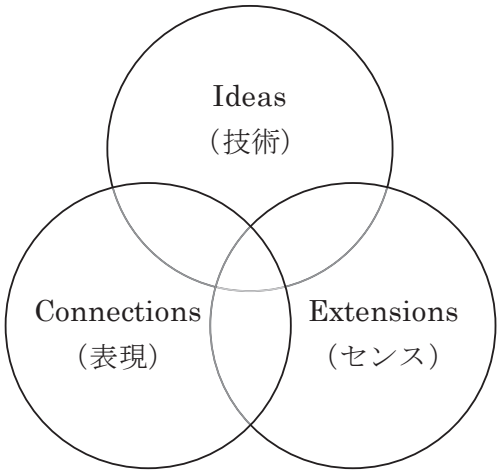

図５　重なり合い，互いに影響し合う ICE

今こうして振り返ると，2019年度は，教師自身の学びが大きいことを改めて確認出来る。公開レッスンは，教える側の言葉掛けと教わる側の反応をどちらも客観的に聴くこと，観ることができ，学生だけの学びではなく，教師にとっても大変学びになる。特に公開レッスンで招聘される講師の方々は大学の図書館にある過去のレッスン録画を見ても，ご自身の様々な経験から紡ぎだされる言葉や導きは「素晴らしく」，私のような若輩者には沢山の気付きを頂くことが出来る。そして教えることは，教わることであり，学生と共に成長することにつながると感じることが多い。レッスンの中で教師は学生へアドヴァイスを出しながら，どのような反応が返ってくるか

のキャッチボールを繰り返しているように思う。教師がレッスンの行き先を見据えるために，教師が様々なことを知らなければ，多様な視点は持てないし，学生のすることに柔軟な対応が出来ない。そのためには教師がもっと学ばなければならないことを改めて痛感した。

印象的な講師の言葉の中に，「自分の癖は，自分で分かって自分で直さなければならない。自分のすることに注意深くなること」といったアドヴァイスがあった。昔，ご指導頂いた演出家の先生が「なくて七癖」と仰っていたことを思い出した。自身の改善，成長のためには，自分のことを良く知る必要がある。教師自身はどうか。学生達は自分自身のことをどう思い，捉えているのだろうか。

5．2020年度コロナ禍におけるリモートレッスン

5-1　リモートレッスン開始前準備

2019年度のFDプロジェクトで行ったICE分析から，次へ進もうと思っていた矢先にコロナ禍となった。対面で行っていた通常のレッスンを2020年度の４月から６月中旬までの２か月半の間リモートでレッスンをした。音や響きがパソコンでどう伝わるか，同じ空間で学べば，言葉での導き以外にも，肌で感じることや雰囲気で伝わることもあると思うがそれが出来ない。同じ空間に居ずしてレッスンをすることは出来るのか，戸惑いはあったが「やらねばならない」状況なのでやるしかない。まずパソコンを使ったら歌声はどう聴こえてくるのか，感覚は伝わるのかが一番気になった。そこでお世話になっているコレペティトールにお願いして，私自身がリモートでレッスンを受けて試してみた。私が使用したのは，一般的なノートパソコンでカメラやマイクを別に用意はしていない。コレペティトールは，スマートフォンである。レッスンを始めて見ると，大きく分けて二つのことが判明した。第一に音がずれる。ピアノの音に合わそうとすると，音がずれて呼吸と合わない。数秒というほどのズレではないかもしれないが，発声等の単音であってもズレが生じ違和感がある。しかし慣れてくれば，発声は単純な音型を選び半音ずつアコードが上がり下がりをするだけなので，自分のすることに集中すれば単音のズレは何とかクリア出来そうではあった。歌の伴奏は弾いて貰っても，歌うことは出来ない。不可能と言って良い。第二に空間の響きはパソコンのマイクで拾うことは出来ない。しかし身体を使い，良い状態で発せられる声はパソコンを通しても相手に届く。そうでないと音が途切れる，また擦れるように聞こえる傾向ということが分かった。言葉で伝えようとすることは可能なようだが，この状態で学生を導くことが出来るのか。

5-2　リモートレッスン

【担当した学生】

声楽専攻	１名45分×５コマ　内１名は自宅がマンションなので声を出すことを多少ためらう。
幼児教育	５名90分（１人18分）内１名は下宿先で声が出せない。
音楽教育	２名90分（１人45分　当初は４名だったが退学者，休学者あり）
弦管打楽器	５名90分（１人18分）
作曲専攻	１名23分　大学近くの下宿先にピアノがないので，大学のレッスン室を借りる。
音楽療法専攻	１名23分

グループレッスンは，１名ずつの個人レッスンで時間を割って配分。特別な状況下なので，時間が短くても毎週学生と顔を合わすことを選択した。対面の時と同じように同じ時間を共有するような形でのレッスンを優先し，録画で送って貰うようなことはしなかった。

◎リモートレッスンで可能，プラスだと感じたことを以下に示す。

１．学生が身体を使い，良い状態で発せられる声はパソコンを通して，教師に届けられた。喉で声を押している，

支えが足りないと音が途切れる，また，かすれるように聞こえる傾向があるので判断がしやすいと思った。
2．グループレッスンの学生達は個人レッスンになったことでレッスン時間は短く感じるかもしれないが，丁寧な言葉掛けをふやした。各々の個性が捉えやすい。密なコミュニケーションを取り，対話をすることが出来た。
3．声楽専攻の学生は，特に基本を大切に呼吸と発声を中心にアドヴァイスする時間を費やした。
4．言葉の意味や詩の内容について捉える時間を対面時よりふやすことが出来た。

◎リモートレッスンでは不可能，マイナスだと感じたことを，以下に示す。
1．通信上時差がある。教師がピアノ伴奏を弾き，学生が歌唱することは出来なかった。
2．空間の響きを感じることは出来なかった。
3．音出し不可能な場所に住む学生は声出しが出来ないので，歌唱での練習が出来なかった。

5-3 リモートレッスンから対面レッスンへ

緊急事態宣言の解除，他県をまたぐ移動が可能となった６月中旬より希望者は対面レッスンに戻った。

◎レッスン時間の変更

消毒や換気でレッスン前後に時間が必要となり，幼児教育（５名）と弦管打楽器（５名）の学生は１人18分ではレッスン時間が短すぎた。そこで，レッスンを隔週にして，一人一人のレッスン時間を長く確保して，順繰りに行った。

◎リモートレッスンを経て，対面レッスンに戻った時に，いくつかの気付きがあった。
1．グループレッスンの学生は，嬉しいことに声楽に興味を示す学生が増えた。
2．リモート中に発声を中心にしたことで対面に戻った時に曲の仕上がりが早かった。
3．対面でレッスンを行うことになった時に，学生は新鮮さを感じて集中していた。
リモートレッスンはネガティブな側面ばかりではなく，ポジティヴで予期せぬ良いこともあった。今後の非常事態に備え，教師がリモートレッスンの良い面・良くない面を把握し，リモートレッスンと対面レッスンの組み合わせることも出来るように工夫することは必要だと考える。

6．まとめ：2016年度，2019年度の研究，コロナ禍リモートレッスンを振り返り，結びつき，気付き

2016年度の「ブルームの改訂版の認知プロセス領域のタキソノミー」から2019年度の「Queen's University の Young & Wilson が開発した ICE モデル」そして2020年度のコロナ禍でのリモートレッスンまでを振り返ってみる。それぞれがバラバラではなく，重なるところがありつつ，新たな発見をしていくという印象を持つ。各回は小さな気付きで良いと思う。気付かなければ成長にはつながらない。教師も学生も自身の気付きが大切である。

例えば2016年度の研究に「思考プロセスへの働きかけ」（山本，2016，p. 80）と出てくる。「働きかけ」を思考の扉をノックし開けるようなことと考えると，様々な角度や言葉掛けで発問し，上手く扉が出来れば「あ，なるほど！」となり，その繰り返しは知的好奇心を擽ることが出来るだろう。その扉を叩く前に，開きやすいように Ideas（技術）が必要だ。そしてそのためには，より良い身体，心の状態（リラックス）が必要だろう，と2019年度の研究にこうして結びついている。これは，どの専攻の学生でも同じではないかと思う。個々の身体や感覚はそれぞれ異なることもあるから，各々にあうような発問をすることが出来れば，これまで声楽への興味が薄かったグループレッスンの学生にも光を感じる。これまでも勿論おろそかにしたつもりはないが，個人レッスンのようにはいかなかったこともあるだろう。声楽専攻外の学生の声楽への向かい方，興味も違ってきたと受け取

れた。個人レッスンになってしまって，逆に手を抜けない！と思ったのかもしれない。これは幸か不幸かコロナ禍によって偶然にもそのようなレッスン体系になったから気付いたことである。一方，声楽専攻の学生は，専攻なだけに懸命なので，高音が出るかとか難しいパッセージが歌えるか等という不安や心配で歌唱する時に固くなりがちになる。その扉を開くのは, Ideas（技術）の上に Connections（表現）という言葉の意味を感じることで，それ以外のことに意識を傾けないことが Extensions（センス）への導きになると考える。私達の研究は小さな水の流れのようなもので川の流れにたどり着けるような努力が必要だと思う。しかし，これらの中にはリモートレッスンで不可能である点もある。やはり部分練習をしている時と，ピアノ伴奏があって和音感や音楽の流れの中での歌唱とは違う。時差はどうすることも出来ない。空間の響きを感じることも出来ない。対面に戻った時に Connections（表現）にはつながりやすいかと感じたこともあるが Extensions（センス）には至りづらいようだった。コロナ禍において，リモートレッスンで声を出す場所がない学生は，歌詞を読むこと，言葉の意味を感じることは出来たと思うが，歌唱は Ideas（技術）の上に成り立つことが大切なので，厳しさを感じた。このようにリモートでのレッスンは, 難しいこともあるが, 私個人は最初に思ったよりも出来ることがあるという印象を持った。不思議なことに画面を通してみる学生達は，対面よりも取り組む姿勢が見えたので，学びの歩みを止めないよう少しずつでも積み重ねられればと配慮をした。緊急時にこの方法をとることは「有り」だと思うが，上記の理由からやはり限界があることも感じる。

最後に，小さな気付きが大切だということ，思考や知的好奇心の扉を叩き，音楽が成長を促してくれることに喜びを見出し，学生と共に分かち合えることを大切に，教師にもまだまだ学びは必要であることを再確認した。

謝辞

2016年の『音楽大学の演奏グループレッスンにおける思考力育成の取り組み』と2019年『音楽大学における FD『草の根プロジェクト2019』」を主催し，論文ご指導も頂きました中西千春先生・本島阿佐子先生，そして，FD プロジェクトに参加し，何度もディスカッションをし，協働学習をした先生方，私のレッスンを受けた学生たちに感謝致します。ありがとうございました。

参考文献

Anderson. L.W. and Krathwohl. D. R.（Eds.）（2001）. *A Taxonomy for Learning, Teaching and Assessing: A Revision of Bloom's Taxonomy of Educational Objectives*.（Complete Edition）New York: Longman.

Young, F. S. & Wilson, R. J.（2000）. *Assessment and Learning: The ICE Approach*. Winnipeg, MB: Portage and Main Press.

中西千春・本島阿佐子他編（2016）『音楽大学の演奏グループレッスンにおける思考力育成の取り組み』飛鳥井出版

中西千春（2016）「第４章 レッスンを分析する枠組み　viii-xii」，中西千春・本島阿佐子他編著『音楽大学のグループレッスンにおける　思考力育成の取り組み』飛鳥井出版

中西千春・本島阿佐子編（2019）『音楽大学における FD「草の根 FD プロジェクト2019」』飛鳥井出版

山本佳代（2016）「身体の感覚を呼び覚ます為の Apply」pp. 77-82. 中西千春・本島阿佐子他編『音楽大学のグループレッスンにおける　思考力育成の取り組み』飛鳥井出版

山本佳代（2019）「基本技術の習得から音楽性への成長―褒めて育てる・認めて育てる」pp. 87-95. 中西千春・本島阿佐子編『音楽大学における FD「草の根 FD プロジェクト2019」』飛鳥井出版

付録　ワークシート１（公開レッスン分析シート）

公開レッスンを分析する意図と目的：教員の指導力の向上・レッスン改善（FD）を目指す

▶ 自分がレッスンをする立場なら，という視点で，自分の着眼点と講師の指摘を比較し，講師の指導から得られるものを探る。

▶ 講師のレッスンの焦点，また，講師の演奏・教育哲学は何かを探る。

▶ 講師の指導が，受講生に十分に伝わっているかを探る。

▶ 講師の指導を参考に自分のレッスン改善に役立てる。

*「講師」：公開レッスンの指導者，「教員」：レッスン分析シート記入者とする

日付：2019 ／ ／　　記入者：

講師名（専門）	日時 / 場所
受講生 年　氏名	受講曲

【受講生の最初の演奏を聴いた所見／講師のレッスン前に記入】

１．受講生の最初の演奏を（I）（C）（E）の観点から評価（1-5）をしてください

Ideas（技術）	Connections（表現）	Extensions（センス）

２．受講生の演奏に対してのコメント：自分がアドヴァイスをするとしたら何に焦点を当てますか。その焦点を分析し，文末に（(I)（C）(E)）で記してください。

【公開レッスン中に記入】

３．講師の指導内容をメモしてください。

４．受講生が講師の指導を理解できない点がありましたか。あなたなら，それを埋めるためにどう指導しますか。

5．自分の指導と講師の指導を比較・対照してください。取り入れてみたいことは何ですか。自分と違うと思われたことはありますか。あるとすると，それは何ですか。なぜそう思いますか。

【公開レッスン直後】

6．3のメモを見てください。講師の指導をICEモデルで分析して，文末に（I）（C）（E）を入れてください。

7．講師の指導の焦点を数字（1-5）で表してください。

Ideas（技術）	Connections（表現）	Extensions（センス）

8．ICEモデルのチェックリストを使って，指導のポイントをチェックしてください。

Ideas（技術）			Connections（表現）		Extensions（感覚・センス）	
	演奏の基礎・知識			つながり・流れ		独創性・魅力・「何か」
内容						
	技術	音質・音量		フレーズ感・音楽の流れ		世界観
		身体の使い方		音色・響き		響きの深化（空間利用）
		奏法・正確さ		解釈		独創性
		読譜力		感情移入		伝達（伝える力）共振
		発音（声楽の場合）		感情表現（表情），表現の意思		想像力
	知識			技術のつながり		特別な『何か』

9．このレッスンで講師が伝えようとしていたことは何ですか。要約してください。

10．その他（感想・気づいたこと・印象的だったことなど）